

●進む文学の里ひつくり

本県で最初に設置されたJRの駅が、真幸駅である。九州山脈を越えるには、吉松駅から矢岳駅まで十四^キの千分の二十五の急こう配を一気に登らねばならない。ここに十一のトンネルを掘ったが、これでは不十分。そこで考案されたのがスイッチバック方式で、開通は一九一一年(明治四十四)年五月であった。

真幸は「真の幸福」につながる。駅舎で結婚式をあげたり、幸せの鐘を鳴らす人もいるという。今、幸せの記念切符は人吉駅が扱っている。

えびの市は文学の里づくりを進めている。市内には種田山頭火、野口雨情、若山牧水、与謝野晶子・鉄幹、西郷隆盛など十二ほどの歌(句)碑が点在している。なかでも山頭火が多く、四つの句碑がある。山頭火が訪れたのは一九三〇(昭和五)年で、開通して間もないスイッチバックを楽しんだことになる。



山頭火句碑。自然や焼酎を楽しんだ山頭火がしのばれる

いや、山頭火が楽しんだのはむしろ自然や風景、焼酎であった。日記ともいえる「日向路行乞記」の九月十七日の項には、「ここには熱い温泉がある、ゆつくり浸かってから、焼酎醸造元の店頭に腰かけて一杯を味ふ(諸焼酎である、このあたり、焼酎のみでなく、すべてが宮崎よりも鹿児島に近い)」とある。この日に作った句が月見荘前にある「ありがたや熱い湯のあふるるにまかせ」である。

えびの市は四方を山に囲まれ、ほとんどが水田で、飯野という地名が稲に関係があるほどの穀倉地帯である。島津氏はこの地をほしがって飢餓の伊東氏と木崎原で戦った。だから、この地独特の民俗文化が育ったともいえる。

その文化のひとつが田の神信仰。地の人は田ノカンサア、または田ノカンと呼んでいる。自然石や石像の形をした田の神は、一見して男性

の性器を思わせる。五穀豊穡(ほうじょう)や子孫繁栄を願う古代からの性器信仰ともつながり、興味深い伝承である。祭りは農耕の始まる旧暦の四月八日。山の神が田の神になって里に降りる日で、秋祭りの「田の神講」にはまた山の神になって里を去る。

しかし、これは神官型で、農民型は少し違う。手にシャモジや茶わんを持ち、顔は苦渋にゆがみ、憂いをたたえて泣き笑っているようにも見える。シャモジも茶わんも性器崇拜に関係がある。苦渋に満ちた顔は年貢の取りたてが厳しく、その思いを田ノカンの顔にこめたものだという。三県が交錯する地では、独特の文化が生き続けている。

鶴ヶ野 勉